

「狭間で」

2025/11/30

脚本 太郎

〈人物表〉

霧崎 宴	(14)	中学二年生
霧崎 祭	(11)	宴の弟
霧崎 詩	(39)	宴と祭の母
島田 凜	(14)	中学二年生
島田 蘭	(11)	凜の妹
島田 務	(46)	凜と蘭の父
島田 理恵	(43)	凜と蘭の母
高城 充	(44)	カルト宗教のスタッフ

〈あらすじ〉

中学生の霧崎宴は、弟の祭が向かいの家の犬を殺してしまったところに直面する。犬の飼い主である姉妹、凜と蘭から糾弾と暴行を受けるも、宴は必死に祭を庇い続ける。

〈文字数〉

6396文字

1. 道(夕)

住宅街の道路。

制服姿の霧崎宴(14)、学校から帰路についている途中。憂鬱そうな表情で小走り。

2. 道(夕)

住宅街の中、霧崎家と島田家の間の通り。

霧崎祭(11)、島田家の庭の前で、血の付いた石を両手に持って茫然と立ちすくんでいる。

そこに宴が現れ、立ち止まる。祭を見つけ、安堵の表情。

宴 「いたいた」

宴、呆れた様子で祭に数歩近付き、

宴 「勝手に一人で先帰っちゃ駄目でしょ」

違和感を抱く。不審そうな様子でさらに祭に近づく。

祭が宴を見る。宴、立ち止まる。

宴 「何してんの？ そんなとこ……で」

宴、庭を見ると、血相を変える。

宴 「嘘でしょちょっと」

宴、しばらく茫然と庭を眺めた後、祭の持った血の

付いた石を庭と見比べる。

宴、祭を睨みつけ、鋭い声を発する。

宴 「祭っ」

祭、宴の声にビックリと反応し、直後に絶叫してパニ

ックになる。

そして、石を放り捨てて走り出す。

宴 「待って」

宴、祭を走って追い、

すぐに追いつき、手を掴む。

二人、立ち止まる。

宴が祭に正面を向かせる。祭、泣いている。

宴、祭に詰め寄って、

宴 「どうしてよ？ こんなことする子じゃないでしょ？」

祭、鼻をすすって、

祭 「だって、あの犬、」

キョロキョロと目を泳がせて、

祭 「毎日毎日毎日毎日毎日毎日、ぼくが通りかかるたび

にガールガールガールガールガールガール……怖くてえ」

宴、怒りの表情のまま、顔を引きつらせる。

祭、重ねて癩癩を起こして泣き叫ぶ。

祭 「ワンコを殺しちゃったよお」

宴、ギョツとする。

祭、さらに重ねて叫ぶ。

祭 「だって怖くてえ」

宴、苦々しげな表情。

言いたいことを飲み込むようにぎゅっと目を瞑って、

苦し気に祭を抱き締める。

宴 「……どうすんのよ」

そこで、少女二人の悲鳴が聞こえる。

宴、ハッとして声がした方向を見る。

3. 島田家・軒先(夕)

一般的な民家の軒先。

島田凜(14)と島田蘭(11)、庭を見て愕然と

している。

4. 島田家・玄関(夕)

宴、三和土の上で土下座している。髪と服が乱れて

いる。

凜の声 「いつか何かやると思ったのよ、だって頭おかしいもん

あの子……ていうかあの家自体！」

祭、その傍らで手持無沙汰に、怯えた様子で立ちす

くんでいる。

宴の正面、玄関の上がってすぐのところ、島田一

家が並んでいる。凜は泣きながら激怒し、島田務(

46)に詰め寄っている。務はうんざりした様子。

蘭はただワンワン泣いている。島田理恵(43)は

ショックを受けた様子で手で顔を覆っている。

凜 「あの家のお父さん、『悪霊に憑かれたから祓う』とか言
ってうちの目の前で焼身自殺するし、お母さんも、変な
カルトに入っってうちにも布教してくるし、子どもはあん
なだし、終わってるよ！」

凜、霧崎家の方向を指さして、

凜 「あんなのの向かいに住むの嫌だから引越そうって何度
も言ったじゃん。こんなことになる前にさ」

務、辟易したように、

務 「お前、そう言うけどな……そんな簡単にいかないよ」

凜 「家族が殺されたのによくそんなこと言えるね！」

理恵、うんざりとばかりに大きな溜息を吐き、

泣き続ける蘭の手を引いて、廊下の奥に去っていく。

ドアの閉まる音。

凜、宴を睨みつける。

凜 「アンタも、いつまでそうしてんの？」

宴、恐る恐る顔を上げ、凜と目が合った途端すぐに
下ろす。鼻血を流しているのが分かる。

凜、一歩進んで、

宴の頭を思い切る蹴る。宴の呻き声。

祭がビクツとする。

務が凜の手を引く。

務 「馬鹿お前、やめろって言ってるだろ」

凜が務の手を振り払う。

宴 「本当に、何とお詫びすれば良いか……」

凜 「謝ったってどうにもなんないじゃん。馬鹿？」

凜、蔑むように鼻を鳴らして、

凜 「そういうことじゃないじゃん、責任って」

務、嫌気がさした表情で凜と宴を交互に見る。

少し言葉を探して、

務 「あー……君ももう、顔上げて良いから——」

その時、祭が急に務の顔を指差し、

祭 「ねえ、あのおじさん鼻が変だよ」

務、驚いて鼻を押さえる。凜、顔を引きつらせる。

宴、慌てて身を起こして、

宴 「シッ！ ころり」

祭 「ねえほら、ちょっと曲がってない？」

宴、祭の手を元の位置に戻す。

宴 「そういうこと言っちゃダメでしょ」

祭 「だってさ、ほら見てよ」

祭が再び務の顔を指差す。

祭 「あれ、隠されちゃった」

宴 「ねえ本当に。もう分かったから、お願いだから大人しくしてて」

務の咳払い。顔がヒクヒクしている。

宴が恐る恐る務を見る。

務 「言っちゃ悪いけど、その子おかしいよ」

宴、申し訳なさそうにしながらも答ええない。

務 「病院とかは連れてってるの？」

宴、オドオドと、

宴 「一応……時々は」

務 「時々？」

務、理解できないものを見るような目で、首を傾げ、苛立ち交じりの溜息を吐く。

務 「正直さ、お宅にはもう結構前から、ほんっとに色々なこととで迷惑してんのね？」

宴 「……すみません」

凛、舌打ち。

務 「いやまあすみませんじゃ済まないんだけどさ……それでね、今まではどうにかこっちも耐えてたけど、今回のはさすがに、出るところ出させてもらうよ、って」

宴、申し訳なさそうに頷く。

務 「それだけは伝えておこうと思って」

凛 「別にお金とかじゃないけどさ」

宴、凛を見る。凛は強く握った拳を震わせている。

凛 「責任は取ってもらうから、絶対」

5. 霧崎家・外観（夕）

一般的な民家。

玄関扉にチョークで『アタオカ』『キチガイ一家』
はよ自殺しろ』などの落書き。
宴が濡れ雑巾で落書きを消している。傍らには水の
入ったバケツ。

6. 霧崎家・ダイニングキッチン(夕)

祭がテーブルについてテレビを見ている。

宴が入ってくる。

宴 「おまたせ。すぐご飯するから」

祭、振り返って、

祭 「今日何？」

宴 「できてからのお楽しみってことで」

祭、不満そうな顔。

その時、車の停車音が外から聞こえる。

宴、ハツとして玄関の方を見る。

車のドアの閉まる音。次いで、玄関ドアの開閉音、

慌ただしい足音。

霧崎詩(39) がリビングに入ってくる。

祭、顔を輝かせ、

祭 「ママ」

宴、嬉しさと不安を入り交じらせて、

宴 「お母さん」

詩、一目散に戸棚に向かう。

宴 「おかえり、今回は長かったね」

詩 「……ん」

詩、戸棚を開けてゴソゴソする。

宴 「あのね、ちょうどご飯にするからさ、お母さんも久々に

一緒に——」

詩 「忙しいの」

宴 「お母さん何探してんの？」

詩、質問には答えず、印鑑ケースを取り出す。

宴、不安そうに、

宴 「えそれ実印だよな？ 何で？」

詩、無視してリビングのドアに向かう。

宴 「待って、どこ行くの?」

宴も追う。

祭もトコトコと付いてくる。

7. 霧崎家・軒先(夕)

駐車場には車が停まっている。

高城充(44)が家の外壁に背を預けて待っている。

詩と宴、玄関ドアから出てくる。

高城、慇懃無礼な感じで微笑む。

詩、高城に、

詩 「お待たせしました」

高城 「いえいえ」

宴、高城を睨み付ける。

宴 「エロジジイ」

高城、面白がるように笑う。

祭が遅れて玄関ドアから出てくる。

高城 「久しぶりに顔を合わせてみれば、口のきき方になってい

ないのは相変わらずですな」

詩、焦って、

詩 「申し訳ありません」

言った後、宴を睨む。

高城、詩を横目で見、

高城 「再教育が必要では? 一緒に連れていきますか?」

宴が恐怖の表情になる。

祭は事態を飲み込めていない様子。

詩が嬉しそうに、

詩 「よろしいのですか?」

高城 「と言いたいところですが、また教会で暴れられても迷惑

なのでやめておきましょう」

詩 「そうですか」

詩、見るからにシユンとなる。宴は安堵する。

高城 「ご心配せずとも、あなたが心から教祖様に尽くせばい

れお子さんたちも一緒に救われることでしょう」

詩、気を取り直すように顔を上げ、

詩 「はいっ」

高城 「よろしい」

高城、背を向け、車の後ろから助手席の方に回り込んでいく。

詩、車のキーを出し、ロック解除。

高城が助手席に乗り込む。

詩、運転席のドアに手を掛ける。

宴 「待って」

宴、詩の手を掴む。

詩 「放して」

宴、詩の手を強く引く。

宴 「たまにはわたしの話聞いてよ、お母さん」

詩、鬱陶しそうに、

詩 「邪魔しないで」

思い切り宴の手を払う。

宴が倒れる。

運転席のドアの閉まる音。直後にエンジンがかかる。

宴が顔を上げる。

車はバックで駐車場を出、右側に進んでいく。

宴 「待ってよ」

宴が走り出す。車を追う。

祭 「あお姉ちゃん」

祭もその後をトコトコ追っていく。

宴 「(叫んで) 今度はお母さんに何させる気？」

車が角を曲がる。

8. 道(夕)

住宅街の道。詩の車が走っている。距離を離して、

宴と祭が車を追っている。

宴が躓いて転ぶ。祭も併せて止まる。

車が走り去っていく。

宴、倒れたまま、それを悔しそうに見つめている。

やがて車は見えなくなる。

宴が立ち上がり、引き返す。

宴 「帰ろ」

祭も付いてくる。

× × ×

宴と祭、歩いている。

自転車の走行音が二人に迫る。

祭、自転車に轢かれ、倒れる。悲鳴。

宴が驚いて振り返る。

自転車に乗っていたのは凜。彼女は自転車から降り、
手にした鉄パイプを振りかぶるところである。

自転車が倒れる。

宴、咄嗟に顔をかばう。

鉄パイプが振り下ろされ、宴の首筋の辺りに当たる。

宴、息を詰まらせ、俯せに倒れる。

呻きながらも、どうにか顔を上げる。

蘭が両手に大きな石を持って祭に近付いていく。祭

は倒れたまま泣いていて、蘭に気付いていない。

宴、ぎよっとして、どうにか身を起こす。

蘭が石を振りかぶる。

宴 「やめてよー！」

宴が駆けていく。

凜が咄嗟に鉄パイプを振るうも、空振り。

宴が祭に覆い被さる。

蘭が石を振り下ろす。

石は宴の肩甲骨の辺りに当たり、かすれた悲鳴が上

がる。石が転がっていく。

宴の苦悶の声。

蘭の声 「足止めしといてって言ったのに」

凜の声 「ごめん、油断したわ」

やがて、宴が凜と蘭を見上げる。

凜はただ憎悪の表情で、蘭は泣きながら怒りを露に、

宴たちを睨んでいる。

蘭 「そんな奴庇うんなら、あなたも同罪だから。自業自得」

宴 「……白昼堂々とこんなことして正気？」

凜 「アンタの弟よりはよっぽど」

宴 「通報されるよ」

凛 「捕まっても良いよ」

宴、息を飲む。

凛 「二人で話し合って決めたんだ。あの子の敵取るって。ね？」

凛、蘭を見る。

蘭、頷く。

凛、再び鉄パイプを振り上げる。

宴、怯えた表情になる。

凛 「何よその被害者みたいな目」

凛が鉄パイプを振り下ろす。

宴が頭をかばい、鉄パイプはその腕に当たる。宴の苦鳴が響く。

凛 「まるでわたしたちが苛めてるみたいじゃん」

宴、息を荒げながらも、凛たちを睨む。

凛、さらに鉄パイプを振り下ろす。宴の脇腹に直撃。宴の嗚咽交じりの悲鳴が上がるも、彼女はどのように姿勢を保つ。

蘭、その様子に、眉を顰めて目を逸らす。

蘭 「……早くどいてよ」

凛、舌打ちして、

凛 「しぶといな」

宴、何度か咳き込んだ後、

凛 「(えずきつつ、かすれ声で)分かってるよ」

凛 「何て？」

宴 「分かってるよ、わたしだって。あなたたちが全部正しいって」

凛と蘭を見る。

宴 「それで、この子と、こんな子をかばってるわたしが全部間違ってるんだよ、どうせ」

凛 「そこまで分かっているなら文句ないでしょ」

凛が鉄パイプを何度も宴の胴体に振り下ろす。宴の悲鳴。

宴、激しく咳き込み、唾と鼻水を飛ばし、涙を流し

ながらも、また凜たちを睨む。さつきより強く。
宴、息を整えてから、怒りを露わにして叫ぶ。

宴 「でも正しいから何だよ。正しいくらいで偉そうにすんなよ。わたしらとアンタらの何が違うんだよ」

凜 「はあ？ 何言ってるの？」

蘭 「違うに決まって——」

祭、気を取り直したようにバタバタして、

祭 「そうだそうだ、言っちゃえお姉ちゃん」

宴 「（金切り声で）お願いだから黙っててよ！」

祭、一瞬、驚いた顔。再び泣き出す。

宴、目を瞑り、祭に強くしがみつくようにしている。

凜、苛立ち。目で蘭に何かを合図する。

蘭、渋い顔。怒りと、葛藤。

蘭、半歩前に出て、

蘭 「もう良いじゃん。分かってるでしょ？ そいつ、あなたのこと大事になって思ってるじゃないんだよ」

宴 「うるさいっ！ 近付かないで！ 馬鹿っ！」

蘭、息を詰まらせる。

凜、舌打ち。かなり苛ついた表情。再び蘭に目で合

図。

蘭 「このっ——」

蘭、何かを振り切った表情をし、

宴を何度も蹴り始める。

蘭 「こっちが下手に出れば何よ！ ワケわかんないことばっか言って——馬鹿はアンタでしょ！」

蘭、蹴る勢いが激しくなっていく。

そして、その声に涙が混じる。

蘭 「ふざけんな……コタロウを返せっ……返してよっ！」

やがて蘭の息が切れ、蹴りが止む。

宴は傷だらけで咳き込み、えずいている。

蘭、肩で息をしながら、宴の様子を見て戸惑っている。

蘭 「何でどかないのよ……」

宴が息を震わせながらやつれた顔で蘭たちを見上げる。

る。

「……まだ？」

宴

「まだ喋る元気あるのかよ」

凛

宴

「まだ、そっちの方が正しいの？ ここまでされてるのに」

蘭

蘭、ハツとし、食い入るように前に出て、

蘭

「当たり前じゃない！ こっちは家族殺されてるのに！」

宴

宴、辛そうに溜息を吐く。

宴

そして悔しげに、

宴

「じゃあ、これ以上わたしどうしたら良い？ 皆わたしを

宴

どうしたいの？」

宴

宴、継るような目になる。

宴

「どうしたら許してくれるんだろう？ どうすればわたし、

宴

正しくなれるんだろう？」

凛

凛、うんざりしたように宴を睨み付けている。蘭は

宴

戸惑いの表情。

宴

祭、宴の下で縮こまって震えている。

宴

「分かってるよ。この子を渡せば良いんでしょ？ それで

宴

あとは……」

宴

開き直ったようにわざとらしい思案顔。

宴

「わたしも一緒になってこの子を攻撃すれば良いのかな？

宴

可愛い犬を殺した悪者を皆と一緒にこらしめて殺しちゃ

宴

えば良い？ それで正解？」

宴

投げやりに笑う。

宴

「（徐々に早口に）そしたら許してくれる？ そしたら正

宴

しくなれる？ そしたらわたしもそっち側に行ける？

宴

そしたら皆、わたしのこと嫌いじゃなくなって、友達に

宴

でもなってくれるのかな？」

凛

凛、苛立った表情。蘭は怒りながらも逡巡する様子。

凛

「で、どくの？ どかないの？」

宴

「無理だよ。仮にそうだとしても、そんなことできないよ」

宴

宴、耐えかねたように泣き出す。

宴

「だってさ、そんなのないじゃん。そんなのないよお」

宴

宴、祭の手を握り、地面に額をつけて苦悶する。

宴

「こっちだって家族なんだよ、そっちと一緒にじゃん。分か

るでしょ？ てか分かってよ」

蘭、見るに堪えないといったように歯を食いしばり、拳を握り締める。

宴、顔を上げる。縋るような表情。

宴 「だからさあ、許してくれたって良いじゃん」

蘭、宴の視線を受けて、目を泳がせながら葛藤する。

やがて一度大きく目を閉じ、決意した様子で、

凜の持つ鉄パイプを引ったくる。

蘭 「一緒じゃないよ」

鉄パイプを宴に突きつける。

蘭 「じゃあ聞くけどさ、立場が逆だったら、あなたは相手の

こと許せるの？」

宴、絶望したような顔。答えられない。

蘭、憎悪を露わに鉄パイプを振りかぶる。しかしそ

の手は震えている。

蘭 「だよね？ そんなのってないよね」

宴、手で頭をかばい、目を瞑る。

数秒後、恐る恐る目を開く。

蘭が涙を流しながら、鉄パイプを振り上げたまま停

まっている。

蘭 「そんなのって、ないよね……」

やがて鉄パイプを落とし、引き返していく。

宴、驚きの表情。

凜 「ちょっと」

凜が納得いかない様子で欄に詰め寄り、その手を掴

む。二人とも立ち止まる。

凜 「約束したでしょ」

欄が鼻をすする。

蘭 「分かってるよ。分かってるけどさ……」

苦痛に顔を歪ませ、

蘭 「難しいよ」

蘭、駆け出す。

凜、ハッとした後、蘭を追う。

× × ×

一方の宴、祭の横で仰向けに倒れている。二人とも先ほどより落ち着いてはいるが、やや嗚咽交じり。

祭が宴をチラリと見る。宴は祭から顔を背けている。

祭 「お姉ちゃん」

宴 「何」

祭 「終わったの？」

宴、島田家の方を見る。凜と蘭の泣き声が聞こえてくる。

宴 「終わってはないよ」

鼻をすする。

祭 「泣いてるの？」

宴、僅かに言葉を探すも、何も見つからず。

やがて開き直ったように、

宴 「泣いてるよ」

祭が僅かに考えるような間。

祭 「痛いのか？」

宴 「……ずっと痛いよ」

祭、ションボリした顔になり、

祭 「お姉ちゃん」

宴 「何」

祭 「……ごめんね」

宴、驚いた顔。

やがて僅かに微笑んで、祭の手を両手でしっかりと大切に握る。

宴 「許さないよ」

終